

英国における自立活動[※]

氏間和仁^{※※}・相澤宏充^{※※※}・一木 薫^{※※※※}
 猪狩恵美子^{※※※※}

緒言

2008年11月1日から10日にかけて、英国の特別支援学校及びセンターを訪問し、日本の学習指導要領に位置づけられている自立活動の内容が英国でどのように指導されているのかについて調査した。本稿はその報告を行う。

1. 英国の学校教育の概要

英国はイングランド、ウェールズ、スコットランドで教育制度が異なる部分がある。本稿はイングランドの教育制度、なかでも公教育について報告する。

5歳から11歳まではPrimary schoolで初等教育が、11歳から16歳まではSecondary schoolで中等教育が行われここまでが義務教育である。16歳から18歳は、大学進学を目指してSixth Form Collegeまたは中等教育のSixth Form課程で学んだり、職業の資格取得を目指したり、就職したりなどの道に分かれる。18歳以上が高等教育を受ける。教育の目的や内容はNational Curriculum (以下NC) で細かく規定されている。

英国の学校教育行政はLEA (local education authority) とよばれる地方教育行政組織が運営にあっている。障害のある子どもが特別支援学校で学ぶのか、地域の学校で学ぶのかといった、就学先の判断を含め、予算の使い方についてまでLEAの判断にまかされている。従ってLEAによってその対応は大きく異なることになる。特別支援の必要性の判断を専門スタッフがを行い、支援が必要だという結論が出されるとStatementと

よばれる文書が発行され、Statementをもつ子どもに対して支援のための資金がつく。Statementを有する子どもは1から2%といわれている(青松・山田, 2005)。特別支援教育は通常の学校に1名配置されたSEN-CO (special educational needs coordinator) (センコーと発音する) が特別支援を必要とする子どもの把握や、専門スタッフのコーディネート、事務処理等を行う。SEN-COは子どもの状態に応じた特別支援の教育そのものを実施する役割ではない。教育を担当するのは例えば視覚障害であればQTVI (qualified teacher of the visually impaired) などの資格を持った教師である。このような特別支援の教員資格は通常の教員資格とは別に必要となる。特別な教員資格は通常の学校での教師経験を数年間積んだ後、大学で1, 2年かけて取得する。事実上、専門の教員資格がないと特別支援教育を担当することはできないようである。

学校教育を支えているスタッフの一つとしてTA (teaching assistant) がある。教諭の指導のもと子どもの学習の支援を行ったり、教材を作成したりする。大学卒業資格を必要としない資格である。TAは通常の学校で1年程度アシスタントとして勤めた後、トレーニングを受けて試験に合格すると資格を得ることができ、正式なアシスタントになる。また、特別支援には教諭だけでなく何種類かのリハビリテーション・オフィサーがかかわっている。例えば視覚障害教育に関する領域では、点字を教える資格、歩行を教える資格などいくつかの専門職がかかわっている。

2. ニューハム地区における視覚障害児の特別支援教育

(1) 組織の概要

ロンドンの北東に位置する10km×8km程度の大きさの、人口25万人のNewhamというLEAに設置されているNew Tunmarsh Centreを訪

※ Class of JIRITSU-KATSUDO in UK
 ※※ 福岡教育大学附属特別支援教育センター研究部員 (第5部門)
 ※※※ 福岡教育大学附属特別支援教育センター研究部員 (第4部門)
 ※※※※ 福岡教育大学附属特別支援教育センター研究部員 (第3部門)

問した。このセンターはロンドン北部の20程度の数のLEAのセンターの指導的役割、特別支援教育のサポートのほかに特別支援の教師をトレーニングするセンターも兼ねている。このセンターには言語やコミュニケーションに障害を持つ子どもに対してサポートを行う、スピーセラピスト、教師、看護師からなるLanguage communication and interaction team、重複障害やディスレクシアの子どもに対してサポートを行う Learning support development and advisory teamをはじめ、いくつかのチームがあり、それらのチームの一つとしてService for the visually impairedもある。視覚障害チームは、通常の学校に通う子供の直接的な支援を行っている。例えば、授業のサポート、授業で利用する教科書や教材の作成、歩行・点字の指導、拡大読書器等の補助具の指導である。

(2) 教育活動

同センターの視覚障害チームのチームリーダーであるマイケル氏に、実際にサポートしている学校を案内してもらった。参観した学校はPrimary schoolのMonega School, Secondary SchoolのBampton Manor School, Sixth Form CollegeのSithForest Gate Schoolの3か所であった。

このLEAはインクルージブ教育を推進しているところが他のLEAとは違った特徴のようである。視覚障害の子どもが学校での行動をたどると、子どもは授業前にSEN-COや教材作成スタッフのいる学校内に設けられたベースルームにやってくる。そこで、授業で利用する点字の教科書や教材を受け取る。拡大印刷の場合は拡大教科書を利用し、点字のようにかさばらないため、毎時間ベースルームに来る必要はないとのことである。そして授業を教室で受け、授業が終わると再びベースルームにやってきて教科書や教材を取り換える。通常の教科教育はこのように通常のクラスの中で行われている。

日本でいう自立活動で取り扱う内容はどのように行われているのかというと、特別な指導の枠が時間割上に設けられている訳ではない。

通常の授業の時間を利用して歩行訓練や点字指導等を受ける。受講するはずだった授業の枠を利用するとか、受講している授業の一部の時間を利

用するなどの方法がとられている。例えば、フランス語のクラスの時に、歩行訓練や点字指導を受けるとか、通常の教科のクラスの中で、拡大読書器やレンズ等の練習を行うといった具合である。

同センターでは、1年間に200名程度の視覚障害の子どもが対象になる。この子どもを1名の例えば歩行訓練を担当するスタッフ（メインティーチャー）が担当することは不可能である。このメインティーチャーは200名の子どもを巡回しながら1週間に20から25名程度を直接指導する。訪問したMonega Schoolでは8名の視覚障害の子どもを担当している。メインティーチャーが不在の時はアシスタントが指導を行う。アシスタントはメインティーチャーが巡回してきた際に指導の目的や内容を学び、メインティーチャーの次の巡回日までの間、その内容を実施する。

特別支援教育を受けるにはLEAのアセスメントを受ける必要がある。その後、アセスメントをリハビリスタッフが読んで必要な支援内容とプログラムを策定する。これに基づいて授業を抜けてスペシャルセッションを受ける。どの授業を抜けるのかなどの具体的な運用は相談し、最終的にはクラスティーチャーが決める。クラスティーチャーはスペシャルティーチャーに対してこのクラスではどんなリソースが必要かを説明し、各週で特別支援を必要とする子どものプランが作成されるようになっている。SEN-COはクラスティーチャーの年間計画をみてサポートを考えアシスタントティーチャーやその他のリハビリ等のスタッフに指示を出す。教える仕事ではなくオーガナイズするのが仕事の内容である。「子どもの指導に対する法的な責任はクラスティーチャーにあるが、保護者も巻き込んで、全員の責任の下で教育を行っている。」というマイケル氏の説明は特別支援教育に対する責任をチームで果たそうとする姿勢がうかがえる印象深い言葉であった。

3. 視覚障害児・者の学校

(1) 学校の概要

New College Worcesterはイギリス中部のWorcesterにある学校である。視覚障害のある11歳から19歳の学生を受け入れている、ちょうどSecondary schoolからSixth Form Collegeまでの課程にあたる、進学を目指した学校である。

学生は英国全土から集まるため寄宿舎が併設されている。基本的にLEAのStatementを持った学生が学ぶのだが、LEAによっては同校で学ぶことが適切であると判断されても財政的な理由で資金が付かないために、私費で通っている学生も在籍しているとのことである。1866年にWorcester College for the Blindとして創立した歴史のある学校である。2007年にRNIB (Royal National Institute of Blind) から独立して、現在の形態になったばかりである。視覚障害単一の学生のための英国で唯一の学校である。生徒の中で全盲という状態の者は少ないそうだが、強度の弱視の状態であっても、効率を上げるために点字を利用している者は多いそうである。

訪問した週は4年に一度実施されるOFSTED (教育基準局) による学校評価が行われており、スタッフは緊張しているとのことであった。

(2) 教育活動

入学は何歳でも可能である。教育内容はNCに従った内容の他に点字、情報機器、歩行や日常生活などの自立へ向けた、日本でいう自立活動に類する内容も含まれている。教員は各教科の教諭であり、QTVIの資格を持っている必要がある。

学校での活動は何でも体験させて、眼が見えなくても何でもできることを理解させることを目的として、スキーやロッククライミング、あるいは飛行場などの広い場所を利用した自動車の運転などの校外での活動も豊富に行われている。図書館には点字で印刷された蔵書はほとんどない。蔵書はデータで保管されていて、点字ディスプレイやオンデマンド印刷で利用されている。

学生にはノートパソコンが1台ずつ学校から貸与される。それぞれのパソコンは個別のニーズに合わせた設定がされている。

音楽のクラスでは、全盲の学生がスクリーンリーダーを利用しながらシベリウスというシーケンスソフトを利用していた。生物のクラスでは、心臓の機能について学べる教育ソフトを利用していた。同ソフトはスクリーンリーダーでの読み上げも可能で、説明は点字で出力できる。

自立活動的な指導内容の決定は入学前の3日間で行われるアセスメントの結果やLEAが作成するStatementを基に決定され、入学後は毎年

の評価の結果に基づいて決定される。例として歩行訓練の評価表をTable 1に示す。このような自立活動的な内容の指導は、NCに沿って決められた教科のクラスが開講されている間、そこを抜け出して行われる。この点はニューハムのLEAとも同じであった。ただし、いつも同じクラスから抜けると偏りが生じるので、抜け出すクラスをまんべんなく設定するようにしている。

歩行訓練は3名のスタッフが携わっている。ここでいう歩行訓練はOrientation and Mobilityのトレーニングである。学生が年齢相応の自立ができることを目的に訓練している。同時に個人のニーズも考慮される。トレーニングは1対1で行われる。歩行訓練は個別に作成されたMobility Programに従って教育される。ここでいうMobilityはSocial Mobilityという、人との会話の方法、買い物の方法や体力をつけてより長距離の歩行ができることなども含まれる。単にOrientationができて、それに基づいてMobilityができるといったことではなく、自立するために必要なSocial Skillも指導内容に含まれている。常に自立を見据えた目標設定と、それを実現するためのプログラムが実施されている。

まずは校内を安全に自立して移動できること、次に校外の町を移動できること、最後は交通機関を利用して町中へ出ていくことを目標に行われる。Sixth Formから入学する学生の場合は、これらの訓練過程を短時間で終了する必要があるので大変なケースがある。どのケースにしても全員の学生に応じた指導計画が作成され、指導後は評価される。通学の指導は、全てを学校で対応することは困難であるため、学生の地元の自治体のMobility Officerと連携をして歩行訓練が行われる。

歩行訓練を担当する教員はバーミンガムにあるNational Mobility Centreで実施されるRNIBが主催する6か月のトレーニングコースを修了している。6か月間は主に理論の教育が行われる。しかし、これがMobilityを教える資格を取る唯一の方法ではない。

MobilityのアセスメントにはRNIBが作成したもの以外に、同校が独自に作成したチェックリストが作成されていた。内容は視覚障害以外の障害を合わせ持つ学生にも対応でき、盲聾の学生への

指導の実績もある。アセスメント表を Table 1 に示す。

その他の、点字の指導、ICT (information and communication technology) の指導なども評価表が作成されており、歩行訓練同様の形態で指導が行われている。

教科指導を行う教師、QTVI、SEN-CO、リハビリオフィサー、アシスタントティーチャーなど専門分化して、より良質な教育を施すために一丸

Table 1 : 歩行訓練の評価表
Mobility Department Student Assessment

Name	
Date of birth	
Eye Condition	
Hearing Difficulties	
Other disabilities or relevant medical conditions	
Effect of eye condition	
Effect of lighting	
Previous mobility training	
Leisure Activities:	
Indoor Assessment	
Room description:	
Balance:	
Posture:	
Floor Textures:	
Gradients:	
Stairs:	
Signs:	
Orientation:	
Body Protection	
Outdoor assessment	
Identify buildings from fountain:	
Cane skills:	
Floor Textures:	
Gradients	
Steps/Kerbs:	
Sings:	
Auditory skills:	
Orientation:	
Terminology	

となって仕事にあたっている姿が印象的である。本教論邦では特別支援教育に携わる場合、特別支援学校教諭免許状を取得することにおいても完全に義務化されていない。教員以外にリハビリオフィサーなど多職種とうまく連携して成果を上げている英国の特別支援教育制度には学ぶことが多分にありそうである。

4. 聴覚障害児の学校

(1) 学校の概要

The Royal School for Deaf Children Margateは、ロンドンから列車で2時間程のイギリス南東のKent州にある1792年創立の非常に歴史の古い寄宿制の聾学校 (Special School) である。1980年代にはWestgate College for Deaf Peopleも隣地に設立されている。

児童生徒数は100名程の学校であるが、知的障害、自閉症、学習障害等の重複障害の児童も多くの割合を占め在籍していた。寄宿制の聾学校であるため、週末は自宅に戻るのが通例であるが、家庭の事情等で1ヶ月程帰宅しない者も在籍している。児童生徒の進路は、健常者が通常通う一般の大学への進学、隣接している上述の聴覚障害者の大学、自宅の周辺の学校や日常生活スキルを学べる施設 (Life Skills Centre) 等、本人の能力や障害の程度によって様々となっているようである。

このような児童生徒の多様性から、コミュニケーションモードは様々であり、実物を使用、PECS、手話 (BSLとSign Supporting English)、スピーチを使用している。英語の教員に聞いたところ、トータルコミュニケーション (コミュニケーションのための手話とも話していた) が基本だということである。目についたところでは、知的障害を併せもつ児童生徒が多いためか、PECSの使用率も高いようであった。

聾学校であるため、STやオージオロジストの部門があるが、それ以外にもPTの部門もある。重複障害児も多いためであろう。また、日本の聾学校にない施設としてsensory roomという部屋があり、感覚訓練を必要な児童生徒には適宜行っているようである。

英国の場合、児童生徒の教育はLEAが責任をもつこととなっているが、重複障害児を受入れて

いるためであろうか、他の自治体からの受入れも多いとのことであった。英国においては聴覚障害児のインクルージョンが進み、聾学校の数は減少していることも関係しているかもしれない。

他の自治体から児童生徒を受入れる場合のアセスメントであるが、既にアセスメントされてLEAのStatementを持っている児童生徒もいれば、聾学校でアセスメントして自治体へ経費を要求する場合もある。また、最終学年の11年生の評価を他の自治体（例えばロンドン）から依頼されることも多いそうである。

(2) 教育活動

本邦の特別支援学校（聾学校）の自立活動においては、コミュニケーション領域に関連し、適切なコミュニケーションやその前提となる聴能、言語表出、語彙や文法、読み書きなどの指導が比較的多く行われている。英国においては、Englishの教科の中にコミュニケーションの項目や領域が存在するため、これらの教科の中で、日本で行っているようなコミュニケーション領域の指導が可能と思われる。例えば、NCの「English (Speaking & Listening)」にはコミュニケーション領域があり、意見を表明する（レベル3）、類似語の語彙がある（レベル4）等を含んでいる。

また、NCの前段階のPスケール（義務教育を受ける5～16歳の子どもを対象に作成されたNational Curriculumのレベル1以下のスケールとして導入されているもの（徳永・宍戸，2004））にもいわばコミュニケーションの基礎項目が存在する。例えば、Englishでは親しい人と簡単なインタラクションを行う（Pレベル1）、注目を引くためにゼスチャアを使用する（Pレベル3）などがある。Pレベルはレベル3までは項目が教科という文脈に縛られない学習の前段階となる項目である。Englishだけでなく、例えばGeographyにおいても、人間の活動を興味深く見る（Pレベル2）という項目などが存在するため、コミュニケーション領域に当たるといえる。また、ScienceやMathではものの形の認知など、環境の把握領域に当たるような項目を含んでいる。Pレベル自体が、本邦の聾学校の自立活動にそのまま当てはまる場合も少なくないと考えられる。

聴能やスピーチセラピー等は時間割に組み入れられており、日本の聾学校の自立活動と似ている。ただし、それらはオージオロジストやSTが行うため教員の仕事の範囲ではない。

では、このような制度の下で、実際にはどのように教員は授業を組み立てていくのだろうか。

IEP (Individual Education Plan) の下に、ICP (Individual Curriculum Profile) があり、教科ごとにターゲット（学期の目標）を作成する。ターゲットはIEPのStatementと密接に関わりをもち、評価の観点としてはNCと関連しており、この部分に担当教員は責任をもつ。基本的には教科ごとに授業の回数は、NCに従うため決まってはいるが、通院や各種のセラピー等抜き出しが必要な場合もある。したがって、児童生徒の実態に合わせ、バランスを考えて柔軟に時間割やカリキュラムを作成する必要がある。

ターゲットの立て方として、重度の障害をもつPスケールの段階の児童生徒の目標設定の場合には、そもそもPスケールが非常に小さいレベルなのでそれ程困らないが、NCの場合にはもう少し大きな評価項目になっているために、評価項目を教員側でさらに下位3つレベル程度にわけて評価する場合もあるとのことである。

この聾学校では、実際の経験を重視しており、例えば、買物という日常生活に深く結びついた内容を題材として使用し、MathやEnglishのコミュニケーション領域を代替するというのも多いそうである。実際の経験による代替はNCの評価項目から見て、正当化（justify）できる場合に限る。NCを達成するということが目標であるため、子どものニーズに合わせて、内容、教科名については調整することはできるということである。この正当化はどの範囲まで可能かという点については、監督局（inspector）からの調査があった時に、その関係性を説明できるか否かという点が重要だそうだ。本邦においても、知的に遅れた児童生徒に教科や領域教科を併せた指導が行われるが、これに近い制度といえる。しかし、本邦とは異なり、「併せた指導」を行う際には相応の正当化が前提である。

そういった意味で、時間割上の教科名は厳密にはNCの教科名でない。買物（Shopping）や手話（BSL）、Skills Centreなどの教科名が児童生

徒の時間割に挙っていた。このような柔軟な時間割は、自立活動と似ている部分であるだろう。

本邦の聾学校の場合は、準ずる教育の部分と自立活動の関係性や、自立活動自体の系統性を考えた上での授業内容の選択が教員に任されている部分が多いと思われるが、英国ではIEPとNCが中心にあるため、少々様相が異なるようである。例えば、日本と違って学年進行にしても、primary school と secondary school という分け方はあるが、生徒の状況から、行動上の問題があり、より primary の方がIEPの達成に適している場合には、年齢的にsecondaryであっても、primaryで教育を受けさせる。IEPがあるので、それに従って、NC上の学習上の進歩が見られるという点の方が重要だとのことである。実際、この聾学校では、多くの児童生徒が16歳までに、NCのレベル3またはレベル4にとどくかという程度の学力となっているとのことである。

すなわち、教員が行う教育的活動は、基本的にNCの進行に基づいており、その中に、本邦の聾学校で行っているような自立活動の内容を多分に含んでいると考えているため、順序性という観点からはあまり破綻はないようである。そして、卒業まではこれらIEPとNCを重視する。ただ、16歳で卒業、18歳が成人として扱われる点では不連続性も存在するということである。

最後に、自立活動とは直接関係ないが、インタビューした教員に、IEPやICPの使用について、個人の目標が細かく分かれ、レベルも異なっていることから授業や評価が困難でないか質問した。彼女は、困難ではあるが、毎日メモを取るなどして対処しているとのことである。このことで進度が把握でき、クラス全体の目標作りにも役立てているので、自分にはやり易いと述べており、印象深いものであった。

5. 肢体不自由児の学校

(1) 学校概要

Cambridge近郊に位置するMeldreth Manorは、英国公認の、脳性まひ児を対象とする慈善団体(Scope)が設立した8～19歳までを対象とする寄宿制の特別支援学校である。在籍者数は28名(うち27名は寄宿舎、1名は通学)で、痰の吸引や経管栄養等の医療的ケアが必要な子どもが1/3

～1/2を占める(看護師助産協会による認定を受けた有資格者が対応)。給食では、STのアセスメント及び助言を受けて、大きさやとろみ等、食形態を調整している。

寄宿舎は、個人のプライバシーと空間の確保(居室は個室又は二人部屋)が充実しており、部屋の照明は個々の実態に応じて明るさが調整されていた。停電や火災への対応(多くの電気設備に対応するための蓄電や、火災警報器が鳴ると自動的に閉まり、移動が困難でも部屋にいる限り安全が保たれるドアの設置等)の他、個室で過ごすプライベートな時間における安全確保(ベッド付近に発作時の声をひろう装置を保護者の許可を得て設置、寄宿舎内には3人の看護師が常駐)も徹底されていた。また、子どもたちが生活の悩み等をスタッフに知られることなく外部機関に相談できるChild Lineや、保護者との連絡に使用できるパソコンが居室フロアに設置されていた。

(2) 教育活動

① 授業の実際

文末に掲載した資料は中学部のクラスで参観した授業の計画である。本単元「クリスマスの鉢を作ろう」はScience, Math, Technologyを合わせた指導で、子ども5名に対し、教師2名、アシスタント2名で展開されていた。子どもたちは、必要に応じて大人の手を借りながら、鉢に球根を植え、土をかぶせ水をやる活動に従事していた。

文末の資料の通り、この授業はPスケールのレベル3(MathについてTable 2に示した)に基づき授業の目標が設定されていた。個々の目標の設定についても同様である。

なお、他のクラスでは、「カリブ海」をテーマ(後述する今学期のテーマ「水」に関連)として材料やメニューを工夫した調理や、構内で収穫したリンゴ(学校が設立される前は果樹園だったためリンゴの木が多い)でジュースを作る学習、地域の通常学校との交流学習(一緒に絵を描いたり、リンゴジュースをふるまったり)等の授業が実践されていた。

また、個別対応の授業も行われており、照明を控えた部屋で効果的に用いられる光(視覚的刺

Table 2 MathのPスケールのレベル3

P 3 (i)	Pupils begin to communicate intentionally. They seek attention through eye contact, gesture or action. They observe the results of their own actions with interest.
P 3 (ii)	Pupils use emerging conventional communication. They may respond to options and choices with actions or gestures. They can remember learned responses over increasing periods of time and anticipate known events. They apply potential solutions systematically.

EQUALS (2003) より引用

激)を注視して数える学習に取り組む男児は、立位補助具で姿勢を保ち、同時に立位の学習にも取り組んでいた。

② National Curriculumと授業の関連

在籍する子どもたち全員がStatementを持っていた。IEP Meetingでは子どもにかかわる全てのスタッフ(担任教師、PT、ST等)がレポートを提出し、個々の教育的ニーズに応じた指導・支援内容を検討する。教師が作成するAnnual Review Reportには、Language and LiteracyやScience等のCurriculum Areaごとに年間の目標と達成状況が記され、IEPとの関連やPスケールに照らした実態も明記される。

実際の授業で教科毎の学習に取り組むことは困難であるため、各教科を合わせた指導形態による実践が展開されている。指導計画を立案するにあたり、3学期制のMeldreth Manorでは、学期ごとにテーマを決めて各授業の指導計画を作成するコアカリキュラムを採用していた。訪問時(11月)の学期のテーマ「水」を提案した学校長は、「今後は子どもの希望もふまえながら先生方の話し合いで決めてほしい」と望まれていた。

NCと授業の関連について学校長に尋ねたところ、「重度の障害の子どもたちにとってはスケールが粗く、適用することは難しい。NC(教科)以上に、個々の子どもにとっての自立した姿を描き、そのために必要な力を、その子どもの得意な部分を生かしながら育む教育が求められる。」との回答であった。指導後の評価については「授

業の記録をもとに授業担当者で話し合い、その結果をふまえて年度末にPスケールに照らした評価を行う。」との回答であった。

(3) まとめ

英国には日本の自立活動に相当する領域が存在しないため、子どもの実態を教科の枠組みで把握した上で、文末資料に示したように実際の授業では教科を合わせた指導形態をとっている。自立活動の指導計画を作成する場合と異なり、教師は実態把握の際に教科の目標系列とのつながりを意識せざるを得ない状況にある。このことは、障害が重度な子どもに対する教育においても、教科の視点から見た指導内容のバランスを担保する役割を果たしていると捉えることができる。障害の重度な子どもたちに対する教育と通常の教育(教科の目標系列)との関連を把握し、指導内容のバランスを追究することは学校教育として重要であり、その点で英国のNC、Pスケールの考え方に学ぶところは大きいと考える。

しかし、今回の学校長の指摘のように、障害が重度になるほど、NCに基づき教科の視点のみで授業を計画することが困難になることも実際であろう。現在、本邦の自立活動の指導では、障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服し、調和的な発達の基盤を培うために、「健康の保持」「心理的安定」「人間関係の形成」「環境の把握」「身体の動き」「コミュニケーション」の内容・項目から個々の子どもに必要な項目を選定し、関連させて具体的な指導内容を設定することとなっている。子どもの実態と目標を教科に至る指導の系統性の中で捉えた上で、実際の授業づくりにおいては、障害による困難を多角的に捉え、それらの関連を把握し指導計画を立案する、自立活動の視点を生かした実態把握、指導目標・内容設定のプロセスが重要不可欠になると考える。

最後に、英国では、障害の重度な子どもたちの指導についても、個々の子どもの実態とNCに照らした期待値及び達成値のデータを蓄積する取組(Table 3)が報告されている(徳永, 2009)。その子どもに対する指導実践の見直しや他の子どもの目標設定に活用する取組としても今後の成果に注目したい。

Table 3 個別の期待値と達成値

氏名	学年	障害のタイプ	話す		聞く	
			期待値	達成値	期待値	達成値
A	2	重度・重複	1.7	1.5	1.7	1.5
B	2	重度・重複	2.7	3.0	2.7	3.0
C	3	重度・重複	1.8	1.8	1.8	1.8
D	2	中度知的障害	5.5	6.5	8.0	7.0
E	3	中度知的障害	7.0	8.0	8.0	8.0

(徳永,2009) より引用

6. おわりに

英国での教育政策にはNCあるいはPスケールという、絶対的な骨格が存在する。それは、各教科や領域教科を併せた指導を行う際、あるいは自立活動的な指導を行う際、教科学習における指導内容のバランスを担保する役割を果たしている点で優れていると考えられる。また、その正当性は評価機関に対して説明する必要があるため、実質的に機能している点も重要である。しかし、障害が重度のケースでは、その絶対的な骨格のみで、教育をプランすることが困難になることもあるようだ。その点、本邦の自立活動という領域は機能的であると考えられる。また、英国の特別支援教育は多職種のチームが有機的に機能していた。教員の特別支援教育の専門資格はもちろんのこと、医療職も深く関わり、特別支援教育を支えていた。このように、教育活動が実質的に機能するための職員の確保が同時に行われている点も、特別支援教育を実質的に機能させるためには必要不可欠である。

ニューハムで案内をしてくれたMichael氏は「私たちの仕事は視覚障害を持った子どもたちが普通の学校で成功することを助けることにある。私のチームの責任であり、地元の学校の責任であり、地方自治体の責任であり、全ての責任において子どもをそのように教育しなければならない。」と語ってくれた。一丸となって子どもの成功に取り組む姿勢について語ってくれた内容である。今回訪れたどの学校でも異口同音に、この子どもの成功を願う姿勢と、それを実現するためのチームプレイの重要性を聞くことができた。2007年に始まったばかりの本邦の特別支援教育をよりよいものにしていくために、英国訪問で垣間見た理念

と具体策はとても参考になる内容であった。

【文献】

- 1) 徳永豊・宍戸和成 (2004) イギリスにおける特殊教育の教育課程「21世紀の特殊教育に対応した教育課程の望ましいあり方に関する基礎的研究」資料「主要国における特殊教育に対応した教育課程の調査研究」、国立特殊教育総合研究所。
- 2) EQUALS (2003) Mathematics TEACHER'S GUIDE (KS1&2)。
- 3) 徳永豊 (2009) イギリスにおける障害のある子どもの学習評価 (2)、教育と医学57, 9。

謝辞

本調査は、科学研究費補助金(基盤研究B)(研究代表:猪狩恵美子)により実施されました。

資料 あるクラス（中学部）の1時間の授業計画

Meldreth School Session Plan	Subject; MATHS/SCIENCE/ TECHNOLOGY	Session Leader Rose Allen	Date Friday 07/11/08 09:15-12:00
Staff	S. Meijer, K. Baker		
Lesson Objectives	Recall choices and activities Make a positive contribution to the processes either physically or by contributing ideas (Equals Year 7 P Level 3)		
Learning Activities : To explore texture soil, bulbs and seeds. To make choices of how many bulbs to plant. To plant seeds on container and label it. : To explore texture soil, bulbs and seeds. To make choices of how many bulbs to plant. To plant seeds on container and label it. : To explore texture soil, bulbs and seeds. To make choices of how many bulbs to plant. To plant seeds on container and label it. : To explore texture soil, bulbs and seeds. To make choices of how many bulbs to plant. To plant seeds on container and label it. : To explore texture soil, bulbs and seeds. To make choices of how many bulbs to plant. To plant seeds on container and label it.	Teaching Activities INTRODUCTION: inform stds, LSAs, SWs of aims and responses. POSITIONS: JS in standing frame DP sidelyer at 11.00 FS on the wedge 11.00 CB classroom chair TEACHING AND LEARNING: Tell students about role of water in plant growth Tell students that they are going to plant own bulbs and water them Students to make choices of bulbs to grow Students to explore soil, water, seeds, bulbs 10.30 BREAK 11.00 Students resume work 11.30 PLENARY: Students reflection of how the session went ASSESSMENTS, DAIRIES 12.00 End of session		
Resources Bulbs, plant pots, water, jugs, spades, symbols, photographs.	Basic Skills Opportunities Making choices, interaction		
Evaluation THACHER:	Notes		
Additional notes 1 OUTCOMES AND ASSESSMENTS: All students will have experienced different sources of sensory stimuli associated with the topic. The will have used the information to make simple decisions and choices Most students will shown a preference for specifilc visual showing visual memory	Additional notes 2		
Adttiional notes 3			

※「Learning Activities」（上段左）には個々の生徒の目標が記されている（実際の計画には個々人の氏名も記載されている）。